

# 第 11 章 カムアウトせず安全に暮らせる方法を考える

宮城県・性と人権ネットワーク ESTO

## 内田有美さん



実施日：2018 年 8 月 20 日 聞き手：杉浦郁子・Natasha Fox

実施場所：多賀城市市民活動サポートセンター（多賀城市）

### 【プロフィール】

1985 年生まれ。宮城県出身。仙台市内 NPO 法人に勤務。「性と人権ネットワーク ESTO」運営スタッフ。宮城県内の交流会の運営を担当。2015 年に『東日本大震災におけるセクシュアルマイノリティ当事者の被災状況およびニーズ・課題に関する調査』を発行。

## 1. ESTO での活動

### ◆ESTO に参加したきっかけ

ESTO に入会したのは、23 歳か 24 歳くらいの頃です。卒業論文のために ESTO にアクセスをしてから、交流会に参加させていただき、正式に入会しました。

卒業論文は、性同一性障害をテーマに書きました。友だちに LGBT の子がいたんです。その子との関係の中で、自分では偏見がないつもりだったんですけど、「私には関係ない世界だから」みたいに思っていたことに気づいた。「自分は差別意識をもっていたのだな」と思いました。

その直後、ブックレポートの課題のために、夫婦が 2 人ともトランスジェンダーで結婚をした、という方の本を読みました。「こんな世界があるのか」とすごくびっくりした。先生とも相談して、性同一性障害者と非当事者との共生というテーマに取り組むことにしました。

まず、ESTO の講演会が仙台であったときに、そこに参加をさせていただきました。LGBT の友だちはいたんですけど、地域で生活をしているというイメージが全然なくて、特にトランスジェンダーの人がテレビ以外でいる、という発想が全然なかったんですね。だから、すごく驚いたのと同時に、「自分はここにいていいのだろうか」「関心だけで来てしまって申し訳ない」という葛藤というか、もやもやがありました。

講演会のあとに、「聞き取り調査をするのに、誰か協力してくれる人を紹介してください」ということで、ESTO の代表の真木さん（本冊子にインタビュー掲載）に直接連絡しました。まだ若くて、怖いもの知らずでした。それが 2007 年ぐらいでしょうか。そのあと大学院に行って研究を続けたのですが、やっぱり私自身が LGBT の当事者ではないので、わか

らないこととか、わからないことへのもどかしさがあって、修了後も交流会に行っていました。

震災後に真木さんから「運営スタッフをやらないか」と声を掛けていただいて、2011年から運営に関わるようになりました。もし自分にできることがあれば、という気持ちでした。

#### ◆ESTOでの活動

真木さんがESTOを始めたのは1998年だと聞いています。

宮城では「宮城交流会」「サークル・カメレオン」「とばっこ交流会」の3つをやっています。「とばっこ」は、仙台弁で、「小っちゃくまとまって」「こじゃっとして」という感じの方言です。私は、サークル・カメレオン以外の2つに関わっています。宮城交流会の開催が年に2回だけだったので、もう少し集まれる機会があったほうがいいよね、という話になって、秋田で毎月行っている交流会と同じようなイメージでとばっこ交流会を始めました(2015年5月から)。

とばっこ交流会の運営は、私だけでやることが多いです。交流会に関わる作業としては、会場を押さえたり、テーマを決めて告知文を作ったり、ぐらいでしょうか。とばっこは、2カ月に1回で、1回2時間くらいですかね。参加は、当事者の方でも理解者の方でも、どなたでもOKです。宮城交流会のときには、テーマを決めてやるんですけど、とばっこのときには、「暑いから、夏のことを話しませんか」とか、「秋だから、好きな食べ物の話を話しませんか」とか、それくらいで。出入りも自由なので、好きなときに来て、あとは好きにしゃべって、という感じでやっています。

宮城交流会は、5、6人くらいは来るかな。とばっこは、やる時間帯で変わるんですけど、少ないときは1人とか、多くても5、6人です。とばっこも、宮城交流会も、印象として、トランスジェンダーの方が多いかなと思います。年代は、比較的若いと思います。

宮城交流会は、学ぶ、考える、意見を出し合う、というような、しっかりしている会で、自分の話をしたい、という声がありました。「今日、こんなことがあったとか、日常会話をする場所がほしいね」「セクシュアリティのことを全然気にせずに話せるような場所がほしいね」という話はしていた。そういう自由な、セクシュアリティを考えないでいられる場所、ほっとできる場所をつくりたいなと思って、真木さんと詰めていきました。

何となくですが、震災後に、当事者の方で居場所を探している、という感じはあります。宮城は、震災後、交流会とか活動がすごく盛んになっているんですけど、いろいろな方がいらっしゃるので、選べるといいのかなと思う。とばっこではちょっと居づらいけど、他の場所だとほっとできるとか、いろいろなところを渡り歩くのが好きだとか。そういう方たちの居場所の1つになればいいのかな、と思っています。

ふらっと来て、またしばらく来なくて、またふらっと来てくださる方がいたりすると、必要なときに使ってもらえていると感じます。必ず行かなきゃいけないとなると、しんどいでしょう。「自分が何者なのか、ずっとわからなかった」という方がいて、「ああ、今日こうやって仲間がいるってことがわかった」「ほっとして帰れる」という声を聞くと、「やっぱりあってよかったんだな」と思います。

完全にオープンなので、すごく話す方もいますし、2時間ひと言もしゃべらないで座っている方もいる。メールだとすごく饒舌な方なんですけど、対人で話すのは難しい。どう運営したらいいんだろうか、などと思い悩むことはあります。

交流会の参加者の個人情報、集めていません。申し込みの段階で緊急連絡先の電話番号をお聞きするんですけど、それは何かあったときにしか使わないので、記録として残すことはしてなくて。どこからいらしているのかも、会話の中でご本人が言わなければわかりません。

ESTOの会員になっていただいた方の名簿はあります。名前（通称名）、連絡先は、代表が管理していましたから、震災のときも、代表が会員さん全員の安否確認をすることができました。会員用のメーリングリストがあり、ESTOの活動情報とか、東北のイベント情報とかを代表が流してくれています。ただ、会員にならずに交流会にだけいらっしゃる方の名簿はありません。

## 2. 震災

### ◆ESTOの動き

震災のときは、代表が会員の安否確認をしたり、「こういうところがあるよ」といった支援情報を流したりしました。カンパも全国からいただいた。支援物資も届いたので、代表がそれを被災した方に渡しに行きました。ESTOは2011年の4月に交流会をしたので、いらした方にはそのときにお渡しし、来られる状態ではない沿岸部の方のところには、代表が車で行ってお渡しして、安否確認をされました。私は、運営スタッフにならないかと声をかけていただいたのが4月だったので、震災直後の代表の活動の手伝いはしていません。

### ◆混乱期

うちの家族は、誰も避難所に入っていません。山沿いで、全員無事でした。沿岸部にいとこがいたり、パートナーが沿岸部で働いていたりしたのですが、安否確認がとれました。

パートナーは、その日に帰って来て、翌朝また職場に戻りました。「2日ぐらいで帰れると思う」と言っていたのに、5日経っても戻って来ず、「生きてるのかな」と心配しました。ラジオでは、荒浜で遺体があがっているとか、仙台港が燃えているとか、ひどい話ばかりで。パートナーは、介護施設で働いていて、入居者さんがいますし、利用者さんの安否確認をしなくちゃならない。沿岸部にお住まいの職員さんが見つからない親族探しに行くとか、そういう方もいらしたので、なかなか戻れなかった。

納得はしていたのですが、それがたぶん、自分でわからないうちにすごく不安感になっていて、震災でLGBTが困る、という発想に至ることができませんでした。少しですが仕事で被災地の女性支援に関わり、女性が困るというのは知っていたのに、です。

### 3. LGBTの被災ニーズ調査

#### ◆きっかけ

うちのほうがかなり落ち着いて、日常生活に戻ってきた頃に、トランスジェンダーの友人と久しぶりに会いました。そのときに「実はあのとき、いつも使っているホルモン剤が、沿岸部のほうでつくってるものだったので、なくなって、他のものを使ったら、副作用ですごくつらくて、しばらくひどかったんだよね」という話を、ぼそっとされたんです。そのときにはじめて、「あ、そっか。災害で困るんだ」ということに気づいた。

2011年の夏になるくらいの時だったと思うんですよね。友人が話して良いと言うので、その話などを大学院の研究室の先生や上司とした。うちの上司は女性の被災状況調査をしていて、「それはちゃんとやらなきゃ駄目なんじゃないの」という話になりました。

仕事で被災地の女性支援の話を書くときもLGBTは1人も見かけないし、話にも聞かないし、メディアからも流れてこないし。見えないと、やっぱりなかったことにされるんだな、というのが怖かったんですね、自分の中で。それでLGBTのニーズ調査をやりました。

#### ◆調査から公表まで

調査は、2012年の年明けから始めていますが、報告書を出すための助成金は2014年度にももらいました。手弁当で始めたので、まず、経費のかからないネット・アンケートを使いました。そのあとに、聞き取り調査をしました。

2012年の段階で、話をしてくれる人を見つけるのは、すごく大変でした。まず、被災三県でネット・アンケートに答えてくださる方は少なかった。ESTOの肩書きでやらせていただいたので、質問項目も真木さんとかなり詰めて、真木さんも何回もネットに流してくれたりしたんですけど。聞き取り調査のほうは、もっと難しかったです。アンケートの最後のところに、「これから聞き取り調査をしたいので、協力してくれる人は連絡ください」とお願いして、何人かは連絡してくださったんですけど……。

調査の時期も悪かったんだな、と思っています。あまりに早すぎた。被災から1年経っていないので。津波があった地域とか、地盤沈下がすごかった地域とか、そういう地域の方からの回答はなかった。届いていなかったのか、まだ、そんな話をできる状態ではなかったのか……。津波被害にあわれた方、避難所を利用した方の聞き取り調査は、ほとんど私の知り合いのついでで直接お願いさせていただきました。協力者の13人のうち、避難所で生活をした方は、2人だけでした。

震災の話をする、と、だいたい皆さん、「いや、自分より大変な人がいるから」とか、「セクシュアリティは関係ないから」とかいった話を、ちらっとされるんです。でも、私は「それってセクシュアリティの問題じゃないの」と思っていました。東北特有といわれることもあります。皆さん、我慢強くて、控えめなところがあつたりしました。

ネット・アンケートは、被災三県からはあまり集まらなかったんですけど、他の県の方がけっこう答えてくれたんです。「震災を見て、自分だったらどうなるんだろうとすごく怖かった」とか、「こうなったら困るから、早く手術をしよう」とか。いちばんショックだった

のが、「逃げようと思うんだろうか、自分が」という方がいた。「このタイミングで死のうと思うのではないか」「でも、遺体が上がったときに体を見られるのは嫌だ」と。私は「どうやって生き延びますか」という話をしたかったんですけど、私の考えが甘かった。「この方たちは津波が来るぞ、というときに逃げるのだろうか」と怖くなりました。

聞き取り調査の協力者のなかにも、「避難所には行かない。自分にとっては安全な場所じゃない」「男女で分かれているから」という方がいました。最低限の「生きる」という選択肢が奪われているんだな、とショックでした。

こういう話をすると、「そんな大変なとき、生きるか死ぬかっていうときに、セクシュアリティのことなんてどうでもいいだろう」と怒られたりもするんです。でも、「セクシュアリティの問題が解決してないから、この方たちは生きられないかもしれない」「社会が変わらなければ永遠に同じことが起こる」と伝えていきます。

うかがった経験をちゃんと伝えていかなきゃいけないと思う反面、「これを発表したときに私に何ができるんだろう」という不安、「生きるか死ぬかの話に、どこまで自分が責任を持てるんだろう」という怖さもありました。調査をする中で、「こっそり生きてるんだから、表に出すな」といった意見もあったし、すごく大変だった方のお話を聞いたりすると、勝手ですが自分がだんだんしんどくなってしまっていました。

聞き取りは、2012年に終わっていました。データも整理していたんですけど……。調査したことをシンポジウムなどでお話はしていましたが、どのように発表するか考え、実際にまとめて発表するまでに3年かかってしまった。

#### ◆避難所の経験を可視化する難しさ

LGBTは、そもそも避難所に行った方が少ないのかもしれないと思います。「震災があったから、避難所に行こう」という思考で行かれた方に出会ったことがない。一般的な流れっていうんですか、「災害だから避難所に行く」というのではない。「津波が来るというし、みんな逃げてるから避難所に行った。その日のうちに帰れると思っていたら、家がなくなってしまった」といった方とか、「もう本当にどうしようもないから行く」という話で。

同性愛の方も、パートナーと暮らしていれば難しいのかなと思います。2人で逃げてきて、「一緒に住んでいます」と言ったら、「え、どういう関係なの。何なの」みたいな話になったり、避難所で家族ごとに分けるときに、「え、なんで家族なの」といった話になる可能性もある。実際にそうだったかはわからないですけど、可能性があれば行かない人もいます。

「避難するのが当たり前じゃない」「生き延びようと思わない」というのは盲点で、とても怖いことだと思う。SRS（性別適合手術）をするのも、自分らしく生きていくために選択するはずなのに、「災害で死体が見つかったら嫌だから、SRSする」って、「ちょっと待って、死ぬ前提なの」って。

少ないケースを拾って、訴えていくしかないと思います。「どのぐらいの人が困ったか」とか「何人ぐらいのニーズがあったか」を聞かれたりするところもあるんですけど、そもそも避難所に行けてない。だから、「これ1件しかないけど、1件あるんだ」「その背後には行けなかった人たちがいるから、もっといっぱいいるはずなんだ」と訴えていくしかない、と

思います。

## 4. ESTO 防災ガイドブック

### ◆防災をテーマにした交流会

2017年には、ESTOで『多様な性を生きる人のための防災ガイドブック』を発行しました。震災のあと、宮城交流会で防災をテーマにしてきて、その中で出てきた意見やニーズをまとめたいと代表と話し合ったからです。ただ、交流会では、ニーズの話も出ましたが、印象としては、どんなふうに変ったということ、ぽつぽつと話される方のほうが多かったかな、と思います。「自分はこうだったんだ」「あのとき、ああでね」とか。

自分の被災の経験を誰かと話したかった人は、たぶん、いたんだと思うんです。宮城だけではないんでしょうけど、地域的な空気として、なんとなく震災後、何年か経って「あのとき、どうだった」というのが日常会話になった。「あ、そういえばさ」「私は、あのときここにいてさ」とか、「あのとき、停電してて星だけはきれいだったよね」とか、普通に日常の中で出てくる。

震災とセクシュアリティのことを、同時に話せる場所がなかったとおっしゃる方がいたので、防災をテーマにした交流会は、その辺のことを吐き出せる場所だったのかなと思います。

### ◆震災を語れない人もいる

一方で、しゃべりたくない、という人もいます。被災の状況が違えば、共有できない部分はどうしてもある。

家も家族も無事で、そういう人たちが集まっている中に、たとえば津波被害に遭った方が来て話せるか……。片や日常生活に戻っていて、震災のことはほとんど過去の話、そこは越えた話だという方と、今から仮設住宅に移転するという方では、復興の度合いや気持ちが全然違います。震災をまだ語れない状況の方が、防災をテーマにした交流会に来られたのか、というと、疑問です。

宮城交流会では、ずっと防災のことをやっていたので、参加した方の中からも、「もう防災いいよ」「つらいよ」「毎回、防災だ、震災だと考えるのは、もう疲れたよ」という感想も出て、時々違うテーマを挟んだりしていました。やはり難しい部分があると感じます。

### ◆クラウドファンディングで実現

災害系の助成金がほとんどなくなっていた時期になっていたので、防災ガイドブックを発行するための助成金探しは大変でした。それで「クラウドファンディングという方法もあるよね」という話になったんです。ギリギリまで迷いました。

ただ、災害のときに本当にセクシュアリティの話ができるにはハードルがまだまだ高いという思いはずっとあります。気持ちの差もある。パートナーは、沿岸部で働いていたので津波の被災地も毎日のように見えて、震災から数日で津波警報が出ているときに、浸水し

たところの利用者を船で迎えに行った。経験しているものが違うので、パートナーと私とで分かり合えない部分がある。難しいです。

喧嘩になるので、パートナーと震災の話をあまりしなかった時期があつて、私自身、災害の話をするのにナイーブになっていた。だから、本当に災害のときにセクシュアリティの話ができるのかな、とか、これを発信して本当に他の地域で役立ててもらえるのかな、といった不安がありました。それから「言わないでくれれば、こっそり生きていられるのに」「避難所に行って黙って座っていることができるのに、発信することで居られなくなるじゃないか」と直接にかなりの勢いで言われたこともあったので、「これを出すことが本当にいいことなのか」という迷いは、最後までありました。

でも、クラウドファンディングが集まってよかったです。どうしても発行したいと思って始めたことですが、皆さんからの応援のメッセージに背中を押された気持ちです。私の力不足で前日まで集まらなくて、どうしようかと思って、本当に胃が痛くなったのですが(笑)。最後の最後に金額が伸びて、おかげさまで目標額を達成できました。集まったお金は、ガイドブックの印刷費、郵送費、シンポジウムにあてました。

#### ◆反響

けっこういろいろなところから、送ってほしいという依頼を受けました。想定してなかったのですが、行政からの依頼が多かったです。「これから防災の対策をつくっていくときに、みんなで勉強するから」ということで、LGBTに対する社会の流れもあった中で、行政が関心を持ってくれたのかな、と思いました。

当事者団体から、地域の民生委員に配るからまとまった部数を送ってほしい、という依頼もありました。地域にいるグループのほうで手渡ししてもらうのは、いいですね。ただ、積まれて終わることにならず、地域で話し合うツールにしてもらえるので。そういう形で、他の団体にもうまく活用していただけたんじゃないかな、という思いはあります。

## 5. 防災に関する地域的な課題

#### ◆東北で考えていきたいこと

東北は、たぶんクローゼットが多い。言いにくいと思うんです。三世同居の人、「家族や親戚がこの地域にいっぱいいる」という人、「この集落、全部親戚なんだ」という人もいるので、その中でカミングアウトすることはハードルがより高い。

震災のあとに、「カミングアウトすればいい」「こういう支援が必要なんだと言ったらいい」という意見が来たんですけど、それは怖い。避難所でパニックになっている状態、あるいは精神的に安定しない状態でカミングアウトしても、落ち着いたあと、地域に戻ったあとにどうなるのか、という懸念がある。東北だけではないと思いますが。誰かと一緒に歩いていただけで、「〇〇ちゃんと△△ちゃんと一緒に歩いてた」とご近所みんなが知っている、という地域もある。そういう中で、クローゼットの人たちの権利をどうやって守っていくのか。

だから、講演に呼んでいただいて話をするときも、「絶対に、カミングアウトを強制しな

いでください」と最初にお伝えするようにしています。友だちにもクローゼットが多いので、言わない権利を守っていく方法というのは、東北が考えていかなければならない課題だと思います。言わないでも安全に生活できる方法を考えたい。ガイドブックにも、言わないで生きていく方法、という視点を入れてあります。

#### ◆カミングアウトする必要のない避難所

そもそも設備が整っていれば問題がないことだと思うんですね。困りごとは、LGBT だから困っている、というより、LGBT の視点からみんなが使いやすい避難所を考えるということかなと思う。

たとえば、「お風呂が男女別になっていて困るので、海水浴場にあるような個別のシャワーブースを、いくつかつくってください」という話をするんです。それを言うと、だいたい「LGBT のためだけに、そんなことはできない」という話になるんですけど、でも、集団入浴は「女性は何時から何時、男性は何時から何時」と決まっている。仕事で遅くなる、公共交通機関が動かず遅くなる、だから、その時間帯にお風呂に入れないという人も、シャワーがあれば使える。手術の跡などを見られたくない、集団で行動することが辛いという人なども使えます。

それから、「避難所には誰でもトイレを設置してほしい」ということも言っています。それは「LGBT のため」だけではない。車椅子の方もいるし、避難所に小さなお子さんを1人置いてトイレに行けない、という方もいらっしゃる。そういう人たちが使えます。

「支援物資も男女じゃなくて、S・M・Lで分けてほしい」とか、「生理用のナプキンは、かげに置くとか、トイレに置くとかしてほしい」と言っていますが、これもLGBT のためだけじゃない。避難所の真ん中にどんって置いてあるところから生理用品を取ってくるなんて、嫌な人は多いのではないのでしょうか。

みんなが居やすい空間というものをちゃんと整備していれば、LGBT から「私はこうなんです」と言わなくてもやっていける、と私は思っているんです。

薬についても、常備薬を入手するためのシステム作りは、LGBT だから必要だということではない。包括的な視点で避難所を見直せば、クローゼットでも避難できるし、安全な場所になると思うんです。

#### ◆同性カップルと避難所

同性カップルが避難所に行けるか、という問題は、同性パートナーの権利の議論がどこまで社会で成熟するかも関係すると思いますが、「家族単位だけで区切らなければいけないのか」と考えることが必要だと思うんですね。

たとえば、私が職場の近くで被災をして、家まで帰るのは大変だから避難所に行くことになったときに、友だちがいたら、友だちと一緒にいたいわけじゃないですか。あるいは、職場の人同士で固まっていたいか、いろいろなニーズがあると思うんです。だから「誰といたいんですか」という話でいいと思うんです。「誰といたいか」ということを確認して、その単位で区切っていく。



実際に家族で区切ってしまうと、DVの被害や虐待がある場合は、すごく困難になってしまうことがある。そういう意味でも、「私は1人でいます」とか「友だちと一緒にいたいです」とかを選べるような避難所運営ができればいいと思います。

#### ◆NPOは小回りが利く

震災のときに、職場でNPOが動いていたのを見ていて、NPOの利点って小回りが利くことだと思いました。たとえば「〇〇さんの家にこういう困りごとがあるよ」とか、「この避難所はこういう支援が必要だよ」といったところを、NPOはパッとキャッチしてつながれる。私はLGBTのことはわかるけれど、LGBTの方が育てている子どもに何かあったとき、子育て支援ができない。そういうときは、つながっている子育て支援団体の人に相談して、対応することができる。

そういうパイプを使って、サポートできるのがNPOなのかな、と。「ああ、じゃあ、そこまで必要だったら、ここまではやるから、ここからはやって」という柔軟性がある。

## 6. 震災後の変化

#### ◆地域性を意識した活動

ESTOの交流会では、クローゼットの人でも来やすいように考えるようにしています。会場の看板に「ESTO」と書くと、LGBTの活動と分かりやすいので書かない。「とばっこ交流会」と書いておけばわからない。そういうことは気にしています。

仙台市でも、中心部からちょっと出ると、電車が1両編成しかないところもある。うちも仙台の中心部から車で45分ぐらいのところですが、どこに行っても絶対に自分の出身の市町村名は言わないです。

#### ◆活動団体の増加

宮城では、「LGBTとしてどう生きていくか」だけでなく、「いざというときにどうやって生き抜こう」とか、「自分たちがこの社会の中で、どう生きていくのか」といったテーマが出てきたのかな、という印象があります。

それから、震災後に団体が急に増えました。やっぱり「震災があって困ったけど、誰に頼ったらいいのかわからなかった」というように、「団体にこういうことをしてほしい」というニーズが出てきたんですね。情報や支援物資を受け取るにしても、つながりがないとたいへんだな、ということを感じた。既存の団体ではカバーしきれなかった部分の必要性を感じて、いろいろな団体が立ち上がってきたのかな、と思います。

震災から7年半が経って、しっかり地域に根を張って、活動を本格化させた団体もある。それぞれの目的意識に合わせて活動しているのではないのでしょうか。

#### ◆他団体との連携・協働について

団体が増えたので、ほかの団体との連携も増え、そこでの良いところと課題も出てきまし

た。

大きいイベントとなるとメディアが入ったりするので、クローゼットの人に対する配慮をどうするか、というのも難しかったです。「写真も名前もOK」の人と、「写真は絶対駄目」の人がいる。運営の中核にいるスタッフにもクローゼットの人がいるとき、その方の権利をどうやって守っていくか。配慮を怠って、望まない形で情報が流れてしまったら大変です。

#### ◆活動のモチベーション

震災関係の活動については、聞いた責任を全うしようと思っているんです。私がヒアリングをした方、アンケートに答えてくれた方たちは、それぞれに困難や思いがあるけれど、社会に直接には言えない方も多し。私は、アライの自認なので、震災で大変な思いをした方たちが言えなかったことを、私が伝えていくことができる。聞いた思いをきちんと社会に伝えて、災害時の対応が改善されて、その方たちが「避難所に行くなどの“一般的な避難”ができるようにする」というんでしょうか。そこには、私にも責任がある、という思いで活動をしています。

ESTO のほうは、大学院の頃までは、あくまで研究者と対象者という関係だったのですが、親しくなってきた、一緒に買い物に行くとか、友だちになる。最初は「自分の中の差別意識に気付いたからやる」「わからないからやる」という感じだったんですけど、だんだん「友だちが困っているからやる」というように変わってきました。交流会にしても、「こういうところに来て話すとほっとする」と言う人がいるから、やっています。

いろいろな価値観の人たちと交流会で話をできるのは、面白いです。仲よくなって、「今日、じゃあ、飲みに行こう」とか、自分の人間関係も広げられる。災害系の活動は、とくに変わっていくことにやりがいを感じます。他の自治体から「こういうことをやるから、ガイドブックをください」と頼まれれば、その地域は確実に何かの形で変わっていく。企業から「研修で使うから、災害系の資料をください」と言われれば、その企業がちょっと変わっていく。それは、たとえば大きく法制度が変わるということではないんですけど、そういう種まきを自分ができているのかもしれないなと思うと、それは大きなやりがいかな、と思います。

#### ◆今後やってみたいこと

居場所づくりを続けていければ、と思うんですね。人が少なく、1人のときもあつたりするのですが、来るまでに時間がかかる方は、たくさんいらっしゃる。踏ん切りがつかないとか、情報はもっていてもアクセスできないとか、そういう人たちが行ける気持ちになったときに、開いている場所でありたい。

防災ガイドブックのほうでは、不足している部分、十分にできなかった部分があります。セクシュアリティと障害とか、セクシュアリティと外国籍とか、多様性の中の多様性の問題をカバーできていなかったのも、そういう活動をしている方たちとつながって、どういう視点を入れていくといいのか、一緒に考えられるような機会をつくっていったら、と思っています。最近、「ろう LGBT 東北」さん（本冊子にインタビュー掲載）とお話したんですけど、

障害がありさらにLGBTで何に困るのか、想像がつかなかったところがありました。

それから、ガイドブックを読んだだけでは、「ふーん」で終わってしまうので、これを使ったワークショップをつくっていただけたいですね。LGBT団体との連携だけではなく、子どもの活動をしているところとか、女性団体とか、障害の活動をしているところとか、いろいろなところとつながって、お互いに困ったことをシェアしていけるような環境づくりができればいいな、と思っていました。LGBTのことをLGBTの団体だけでやるだけではなく、ほかの団体とどう連携してやっていけるのか。他の団体と一緒にやっていたら、情報をもらえたり、その団体の方たちがLGBTの理解者になる。そういうふうに、緩やかな関係をつくっていけるのがいいのかなと思っています。